

## 人権劇「きぼうの水」シナリオ

### 【一の場面】

ああと つくる ナレーター	(二人、名前札をつけて登場する。) ああとは小学4年生の女の子。つくるは、小学1年生の男の子。 二人は、とってもなかよしのきょうだいです。  ああとは、本を読むのが大好き。つくるは、ひとなつっこくて、いたずら好きですが、言葉が話せません。
つくる	(つくる。退場する。)
ナレーター	ある日、ああとは本を読んでいて、なんでも願いがかなうという「きぼうの水」があることを知りました。
ああと	「そうだ！きぼうの水があれば、かわいいつくるも、言葉が話せるようになるかも知れない！」
ナレーター	ああとは毎日毎日まよいました。友だちに「きぼうの水」のことを話すのですが、だれも信じてくれません。でも、たった一人だけ、ああとの真剣に聞いてくれた友だちがいました。それは、同級生のかなちゃんです。
かな	(かな。登場する。)
ああと	「かなちゃん。わたし、『きぼうの水』を見つけないの。だって、『きぼうの水』があれば、きっと弟のつくるも言葉を話せるようになると思うの。」
かな	「わたしも『きぼうの水』の話、信じる。きっと見つかるわ。わたしも手伝う！」
ああと	「かなちゃん、ありがとう！」
ああと	「『きぼうの水』は、『不思議の森』をぬけて、『にじの谷』をわたって、『風の丘』をこえたところの『光る岩』の近くにあるわ。」
かな	「じゃあ、まず、『ふしぎの森』を探さなくっちゃね！いこう！ああとちゃん。」
ナレーター	ああととかなは、星のきれいな夜に、こっそり出かけることにしました。

## 【二の場面】

ああと・かな	(登場する。)
ナレーター	ああととかなは、野原をこえ、川をわたり、山をこえ、湖に出ました。
ああと	「ああ……。おなかがすいた……。もう、歩けない……。」
かな	「つくるちゃんのために、『きぼうの水』を見つけるんでしょ！がんばろう！」
ナレーター	二人が顔を上げると、湖の向こうに、大きな森が見えました。
かな	「ああとちゃん。あれってもしかして『ふしぎの森』じゃない？」
ああと	「うん！行ってみよう！」
ナレーター	二人は湖の向こうにある森に入っていました。
ナレーター	森に入ると、動物たちが楽しそうに歌ったり、おどったりしています。
森の動物たち	(楽しそうに歌って、踊っている。)
ナレーター	二人は、動物たちに合わせて体をゆらしている大きな大きな一本の木を見つけました。
ああと	「あの大きな木に聞けば、何か分かるかも知れないわ。」
かな	「うん！行ってみよう！」
ナレーター	二人はその大きな木に話しかけてみました。
ああと	「わたしたち、『きぼうの水』を探してるんです。」
かな	「何か、『きぼうの水』のことを知ませんか。」
大きな木	「『きぼうの水』？ああ、よく知ってるよ。案内役にこの子をつけてあげよう。おい、リズム。ちょっと、おいで。」
リズム	「はい。何ですか。」

大きな木	「この二人が、弟のために『きぼうの水』を探しているそうじゃ。案内してやってくれるか。」
リズム	(登場する。) 「わかりました。いいですよ！」
ああと・かな	「ありがとう！」
ナレーター	リズムは、音楽が大好きな子りすです。リズムに合わせて楽しく踊ったり、いろんな曲をつくる力をもっています。でも、ああととかなは、ちょっぴり心配でした。なぜって、リズムは目が見えないのです。
ああと・かな	「だいじょうぶかなあ……。」
リズム	「さあ、行きましょう！まずは、『にじの谷』を見つけないとね！」
ナレーター	リズムは、風の音をよーく聞きながら、二人を案内してくれました。リズムの歌が二人をはげましてくれました。
リズム・ああと・かな	(リズムを先頭に歩き出す。)

### 【三の場面】

ナレーター	三人は、深い深い谷にやってきました。
リズム	「ここが、『にじの谷』ですよ！」
ああと	「たしかに、谷だけど……。」
かな	「にじなんて、どこにもないわ……。」
ナレーター	そうしているうちに、大雨が降ってきました。
リズム	「どうしよう。はやくこの谷をわたらないと！」
ああと	「こわい！かなちゃん！」
かな	「どうやってこんな谷、わたればいいのか？」

アソビィ 「はっ、はっ、はー。そんなの簡単だよ！」

ああと 「あなた、だれ？」

アソビィ 「おれ？おれはねずみのアソビィさ。学校はいつもさぼってるけどね。」

かな 「なんか、心配……。」

リズム 「はやくわたり方を教えてくれよ！」

アソビィ 「わかった、わかった。ほら、向こうに一本橋があるだろ。それをわたれば簡単！」

ナレーター 三人は、いっせいにその一本橋を見ました。でも、その橋は大きな丸太の木がかけてあるだけで、手すりも何もありません。

ああと 「こんな橋をわたるの無理だよ……。」

かな 「谷底に落ちて、死んじゃうよ……。」

アソビィ 「大丈夫だよ！この橋は、勇気をだして歩き出せば、ぜったいに落ちない橋なんだから。誰かのためにがんばりたい。そんな勇気さえあればね。」

かな 「勇気……。」

ああと 「つくる……。」

リズム 「勇気なら二人とも大丈夫だろ！さあ！いくよ！」

ナレーター ああととかなは、お互いを見て、大きくなずきました。

アソビィ 「行くよ！ついておいで！」

ナレーター 4人は一本橋をわたりはじめました。

アソビィ 「ほうら、わたれただろ！」

ナレーター みんなが後ろをふりかえると、そこには大きなにじがかかっていました！

ああと・かな 「にじの谷！アソビィ、ありがとう！」

## 【四の場面】

ナレーター	「にじの谷」からしばらく歩くと、小さな丘が見えてきました。
アソビィ	「ぼくの友だちを紹介してあげるよ！おーい！パレットー。」(手をふる。)
パレット	「あら、学校ぎらいのアソビィじゃない？どうしたの？」
アソビィ	「いやいや、この3人が『にじの谷』をわたりたがってたから、案内したのさ。」 (紙に書いて)
ああと・かな・リズム	「こんにちは。はじめまして。」(紙に書いて)
パレット	「わたし、パレット。よろしくね！でも、どうして『にじの谷』をわたりたかったの？」
ああと	「わたしたち、『きぼうの水』を探しているんです。」(紙に書いて)
かな	「ああとちゃんの弟のつくるくんが言葉を話せるようにしてあげたいんです。」(紙に書いて)
パレット	「そうなんだー。わかったわ！ここは、『風の丘』。1年中強い風が吹いていて、だれもこの先に行くことはできないの。でも、そういうことなら、わたしにまかせて！」
ナレーター	実は、うさぎのパレットは耳が聞こえません。だから、友だちのアソビィは、いつも紙に書いておしゃべりしているのです。でも、パレットは本を読むのが大好きで、とてもものしりでした。
パレット	「ここは、1年に1時間だけ、風が止まるときがあるのよ。それが、ちょうど今日なの！もうすぐ風が止まるわ。その時がチャンスよ！」
ああと・かな	「ありがとう！」

## 【五の場面】

ナレーター	ああとたちは、パレットの助けを借りて、『風の丘』をこえることができました。しかし、『風の丘』をこえたとたん、ものすごい光がああとたちをおそいました。
-------	--

全員	「あー……！！！」
ナレーター	熱さとまぶしさとこわさで、みんなはくじけそうになりました。そのとき、リズムが歌を歌い出しました。  (音楽を流す。)  (全員で歌い出す。)  (岩の光が弱くなる。)
ナレーター	ああとたちの歌声で、岩の光はだんだん弱くなり、ふつうの岩になりました。岩のそばには……。
ああと	「あ！あれは！」
かな	「もしかして！」
リズム・アソビィ・パレット	「『きぼうの水』！」
かな	「どうとう見つけたね！水をくみに行こう！」
ああと	「まって！」
かな	「どうしたの？」
ああと	「もう『きぼうの水』はいらない。だって、目が見えなかったって、耳が聞こえなかったって、学校に行ってなかったって、みんなそのままですてきな友だちだもん。つくるも、話はできないけど、そのままでもいいと思うの。」
リズム・アソビィ・パレット	「うんうん！」
かな	「わかったわ！じゃあ、みんなで帰りましょ！」(みんなで帰る。)
ナレーター	みんなああと同じ気持ちでした。だれでも苦手なことはあります。でも、そのかわり、その人にしかないすばらしさをもっているのです。ああとは、ちがいをもらったたくさんの仲間に出会い、助け合うことのすばらしさを知りました。「きぼうの水」を探す旅は、こんな大切なことを知るための旅だったのです。